

## 二つの宗祇流

——宗祇と「宗祇流」——

小 高 道 子

東常縁から宗祇に相伝された古今伝受は、三条西実隆・近衛尚通・肖柏に相伝された。宗祇を継承するこれらの古今伝受は宗祇流といわれている。例えば鳥津忠夫氏は「文明十九年に至って、実隆への伝授が実現する」ことについて「宗祇流の古今伝受が完成することになり、

以後は三条西家の権威によって重み加わってゆくのである」とされた。<sup>①</sup>新井栄蔵氏は『日本古典文学大事典』（一九八四年 岩波書店）の

「古今伝授」の項目で、「二条流説」を「二条堯恵流」と「二条宗祇流」とに分けて解説された。ここで言う「二条宗祇流」は、東常縁から宗祇に継承された古今伝受をさすと推定できる。

授受年月日および授受書類一式がほぼ完全に認定できるものとしては、十五世紀後期に、頼阿から伝わる二条流説を堯孝から伝受した二条堯恵流の古今伝授と、堯孝に教えを受け、藤原為家から東家に伝わる二条流説を東常縁から伝受した宗祇の二条宗祇流の

古今伝授とが認められる。ただし、この両流の古今伝授の教説が、中世初期以来の二条家の伝授内容をどう取り込んで組織化したかは、なお未詳である。

### 一 「古秘抄」に含まれる「内外表裏事」

一方、新井栄蔵氏が陽明文庫蔵『古秘抄』を『古秘抄別本』として紹介し、宗祇流「裏説」について論じてから、『古秘抄』に含まれる「内外表裏事」は宗祇流「裏説」を論じる際の基本資料とされている。<sup>②</sup>国文学研究資料館の論文データベースで「宗祇流」を検索すると、新井氏が「宗祇流」として紹介し「裏説」について論じられた流れを汲む論文が提示される。新井氏は『古秘抄』について、『図書寮典籍解題続文学篇』を引用して「後水尾院預りの近衛流伝授の正本」として同書をもとにして「宗祇流」について論じられた。

『解題』（私注『図書寮典籍解題 続文学篇』）は後水尾院預りの近衛流伝授の正本に比定し得るかとする。近衛流伝授すなわち宗祇から近衛尚通が伝受し、以後代々の近衛家の当主によって相承された近衛家伝の古今伝授資料（注略）のおそらく多くのものは万治四年正月の京都大火によって院の御文庫で焼失するが、右の元和三年の写しとその書写奥書とが残ったことはさいわいである。

新井氏の論を受けて「内外表裏事」をもとに「宗祇流」について多くの論文が記された。『古秘抄』に含まれる「内外表裏事」について鈴木元氏は「宗祇流伝授の初期段階のもの」として次のように言う。<sup>3)</sup>

同切紙によれば「裏説」の解釈法では歌の余情が失われることもあると述べており、このような二重の解釈法を全肯定では捉えていなかったことを指摘している点である。このことは、「裏説」の目指す方向が和歌の余情とは相容れないものであることを、はからずも伝授にかかわった当事者の口から語っているわけである。ところが、この解釈法は、宗祇流の特徴として次第に肥大化していく傾向を見せる。故に、和歌の余情と対立するとの自覚のもと、抑制的に「裏説」の導入されたこの切紙の説は、宗祇流伝授の初期段階のものかもしれない。

## 二 宮内庁書陵部蔵本

新井氏により「宗祇流」とされた『古秘抄』の「内外表裏事」は、『解題』では「後水尾院預りの近衛流伝授の正本に比定し得るか」とされた。しかしながら、宗祇を継承する古今切紙を参照しても「内外表裏事」は見出せない。<sup>4)</sup>「内外表裏事」は宗祇から直接伝受した門弟への古今伝受では相伝されなかったと推定できる。同書は智仁親王の奥書に次のように記されている。

或人近衛後法成寺御抄并肖柏聞書等六冊在之、一覽之次、此一冊無所持之故、一日之中二度院參之間、令書写、重而可書改者也

元和三年八月十六日未刻書了

李部

「元和三年」と記されているから、智仁親王は既に細川幽齋所持の古今伝受資料の書写を終了している。この奥書を検討すると『解題』のいう通り、「古今伝受以後、智仁親王が親ら諸処の伝受資料（切紙類）を蒐集した」ものであろう。すると、細川幽齋が継承して智仁親王に相伝した古今伝受の内容とは異なることになる。また、「或人近衛後法成寺御抄并肖柏聞書等六冊在之、一覽之次、此一冊無所持之故」とあるから、ここで親王が書写したのは「無所持」の一冊と推定できる。「近衛後法成寺御抄」「肖柏聞書」は、すでに書写しているから、それ以外の一冊であろう。また「元和三年八月十六日」には、後水尾天皇は在位中であり「院」は後水尾院ではなく後陽成院であろう。すると

宮内庁書陵部蔵『古秘抄』は「後水尾院預りの近衛流伝授の正本」ではないと推定できる。本書が「後水尾院預りの近衛流伝授の正本」と異なる以上、『古秘抄』と宗祇との関係は改めて検討する必要があるう。

### 三 陽明文庫蔵『古秘抄別本』

新井栄蔵氏は、宗祇流の裏説を記した陽明文庫蔵「古秘抄」を「近衛流古今伝授切紙」として影印で紹介された。だが、海野圭介氏の研究によると、<sup>(5)</sup>同書は陽明文庫に所蔵されてはいるが、近衛家に伝来したのではなく、後西院蔵本を基熙が書写したことにより、近衛家に所蔵されることになったと推定される。『古秘抄別本』が「近衛流古今伝授切紙」であることの根拠について、ここには記されていない。「書陵部にも同様の物がある」とするが、新井氏が「区別するために別本と副題しておく」とされるように、両者は別な書物である。こうしたことから、『古秘抄別本』が「近衛流古今伝授切紙」である根拠は、『古秘抄別本』からは見出せないことがわかる。『古秘抄別本』「内外表裏事」には、宗祇を継承する確証は見られない。

『古秘抄別本』には、宗祇を継承する三条西実隆・肖柏の切紙に見られた道統を示す系図、切紙の寸法を記した切紙が見られず、いかなる道統によって継承されたものが明らかではない。それゆえ、古今伝受において切紙として相伝された資料かどうかも定かではない。ま

た、三鳥については繰り返し記されているのに対して三木については一度のみである。こうしたことから『古秘抄別本』は、宗祇の古今伝受を直接継承した実隆・肖柏・近衛尚通の切紙とはかけ離れているといえよう。

新井栄蔵氏が「宗祇流」について論じられた後、宗祇の古今伝受を直接継承する三流の古今切紙（宮内庁書陵部蔵）、宗祇から三条西実隆に伝えられた古今伝受資料（早稲田大学蔵）などが次々と影印・翻刻で紹介されている。これらの資料から、「門弟随一」として宗祇の古今伝受を継承したのは三条西実隆であり、実隆以外に肖柏・近衛尚通が宗祇から直接古今伝受を受けていることがわかる。一方、新井氏が「宗祇流」として紹介された『古秘抄』などの資料は、宗祇との関係が不明であり、「新宗祇流」あるいは「近世宗祇流」とも言うべきものである。宗祇からの道統が明らかな直系の宗祇流こそ、「宗祇流」と称するにふさわしいであろう。

### 注

- (1) 「古今伝授と東氏」（『東常縁』一九九四年 和泉書院）
- (2) 「宗祇流の古今集注釈における「裏説」について——古今伝授史私稿——」（『文学』昭54・7）、「古秘抄別本」の諸本とその三木三鳥の伝について——古今伝授史私稿——」（『和歌文学研究』昭52・3）、「（影印）陽明文庫蔵古秘抄—別本」（『叙説』昭54・10）
- (3) 「古今伝授は和歌を進展させたか」（『中世詩歌の本質と連関』平24 竹林舎）

- (4) 「宗祇を継承する三流の古今切紙」(『中京大学国際教養学部論叢』「宗祇を継承する古今切紙と『古秘抄別本』」(同 平30・3)
- (5) 「東山御文庫蔵『古今集相伝之箱入目録』・同『追加』考―古今伝受後の後西院による目録の作成をめぐって―」(『古代中世文学論考』6 平13・10 新典社)